

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 特別展「貝へのあこがれ」

開催期間：2025年7月12日（土）～2025年9月7日（日）



縄文人のあこがれ～オオツタノハ製貝輪



南の貝をまねた土製品～イモガイ状土製品



関連事業 拾ってつくろう！貝からアクセサリー



関連事業 貝標本をつくろう

【企画展の目標】

- 1万年続く縄文時代を通じて食料となり、道具の素材として使われ、身を飾ってきた「貝」に着目した展覧会を開催し、現在とは異なる縄文時代の環境や生活、出土品からうかがえる縄文人と貝の関わりについて学び、貝を育む縄文の海とともに現在の海の恵みについても学ぶ契機とする。
- 展示への理解を深める講演会のほか、海岸での体験活動等の併催行事を行うことで、展覧会観覧とあわせて縄文から現代の海へと視点を移し、現生貝類や海の環境へと学びを広げ、海のめぐみと人とのかかわりから、「海を守る」意識に結び付けていく。

1. 企画展示の内容

■開催期間：2025年7月12日（土）～2025年9月7日（日）

■開催場所：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 企画展示室

■入場者数：6,406人



是川縄文館 外観

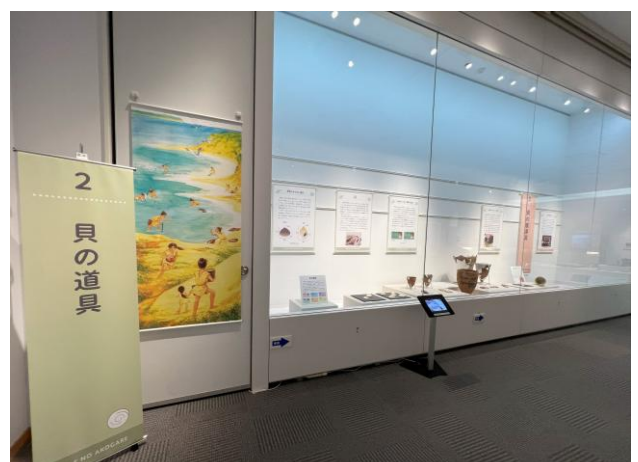


特別展会場 入口

特別展「貝へのあこがれ」は、5つの章で構成し、東日本の遺跡を中心としたさまざまな貝製品から、貝をめぐる縄文人のものづくりと交流を紹介する展覧会である。展示の中には、気候変動による海の変化や、海辺につくられた縄文人のムラと貝塚、縄文人が食べた貝と現在の八戸市で水揚げされる貝などに触れ、海と人とのつながりについて考える契機となることをめざした。



「1. 縄文人と貝のかかわり」(1-①)
映像では八戸地域の海の変化を展示



「2. 貝の道具」(1-②)
貝の種類や、貝製の道具を展示

今回の特別展では、食用としての貝ではなく、素材としての「貝殻」の利用から、縄文人と貝との関わり、貝を育んだ海との関わりについて迫る展示とした。

「1. 縄文人と貝のかかわり」では、展示の導入として、人がいつから貝を利用するようになったのか、貝塚の形成、縄文海進による海の変化、八戸市内の貝塚について、写真・地図と映像で解説している。映像では、八戸地域の縄文海進と、火山噴火による湾の変化

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

を解説し、貝を通して海と縄文人の結びつきを知るコーナーとした。

「2. 貝の道具」では、道具としての貝として、重要文化財宮城県里浜貝塚出土の貝刃のほか、土器の施文具としての貝殻を紹介している。道具そのものに加え、使用状況の再現実験動画、復元制作品などをあわせて展示し、海に面したムラの生活の中で、貝が食料はもとより、身近な道具素材としても使われていたことに注目するコーナーとした。



貝刃（2-①）

復元製作品を使った魚のウロコ取り動画も展示



「3. 貝の装身具」（2-②）

多様な装身具を現生標本や復元製作品とともに展示

「3. 貝の装身具」では、重要文化財青森県薬師前遺跡出土貝輪・宮城県里浜貝塚出土貝輪のほか、貝製玉類・垂飾などの貝製の装身具と、素材となった貝の現生標本を展示している。貝製装身具は、種類によって貝種が選択され、素材となる貝殻のかたちや色調などからは、素材の選択にこだわった縄文人の美意識も伺える。素材となる貝殻は、漁のほか、打ち上げ貝も利用していたことを紹介し、打ち上げ場所のそばに、製作活動を行うムラがつくられるなど、海の様相を熟知した縄文人の貝との関わりを紹介した。

展示に加え、併催事業として海辺で貝を拾い、装身具をつくる体験を行い、縄文人の素材採取から製作までの追体験とした。



様々な貝素材の装身具（3-①）

※現生貝標本や生息地も開設



復元装身具の着装状況（3-②）

※実際に着用できるコーナーも設けた

「4. 貝へのあこがれ」では、南海に生息する貝類でありながら、東北から北海道まで貝製品・模倣土製品が出土するタカラガイ・イモガイ・オオツタノハに着目した。素材の採集や貝製品・模倣土製品の分布から、遠くまで運ばれ、時には模倣品まで製作した縄文人の「貝へのあこがれ」と、広域な地域間交流による価値観の共有に迫った。

出土品や現生標本、地図に加え、現代でも捕獲が困難なオオツタノハを捕獲する動画を再

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

生し、貝の捕獲・採集についてわかりやすく伝えた。

ここでは、前章までの地域の海や貝と縄文人とのつながりから、貝を通じた地域間交流へと視野を広げ、現代までつながる海を通じた交流へも学びの関心を広げることをめざした。



オオツタノハ捕獲映像（4-①）
※採集した現生貝標本も展示



貝製装身具を模した土製品（4-②）
※実際の貝製品と並べて展示



タカラガイ（写真上）とタカラガイ状土製品
（写真下）（5-①）



オオツタノハ製貝輪（写真左）とオオツタノハ製貝輪
をまねてつくった土製品（写真中央）（5-②）

「5. 縄文の海、現代の海」では、八戸市内の縄文時代の貝塚から出土した貝と、現代の八戸で漁獲される貝、八戸の海岸に打ち上げられる貝を展示し、貝種の変化や海的环境変化について紹介した。現代の打ち上げ貝から縄文時代の貝製品や貝塚の立地に迫る研究も紹介し、縄文時代の展示から現代の海へと学びの視点を広げた。あわせて、復元した貝製装身具を身に着け、砂浜の画像パネルの前で写真を撮るコーナーを設け、展示を体感できるコーナーとした。



現在の海岸で採取した打ち上げ貝（6-①）



縄文時代の貝に触る・復元装飾品を身に
着ける体験コーナー（6-②）

【来館者の声】

○海からの恵みを食料だけでなく、生活のすべてに活用するその知恵は、なんでも使い捨てにする現在の大量消費社会は見習うべきと思った。ありがとうございます。

○海があるとおしゃれができるんだなぁと思った。食だけじゃなく着飾ることにも目を向けられるのは心の余裕！縄文時代の人々の気持ちに思いをはせられた展示でした

○いままで海に行って貝をひろっても「きれいだな」で終わっていたけど、その貝がどこからきたのか知ると自分の世界と海がひろがっていいなと思いました。海をきれいに大切にしたいです。

○海というよりは人が貝を食料として、またはアクセサリーや道具として様々な向き合い方をしてきたということが分かりました。あとは地域による貝の分布の違いが興味深かったです。地元だけでなく他の地域の海岸にも足を運んでみたいと思いました。

関連事業の様子

■ 関連事業①特別展考古学講座「貝輪の考古学—古代人を魅了した貝輪の謎にせまる—」

【開催日時】2025年8月31日（日）14:00～16:00

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 体験交流室

【参加者数】42名

【実施内容・目的】

- 特別展考古学講座として、中部地方から礼文島まで出土する「オオツタノハ」製貝輪の研究者を講師に招聘し、講演会を開催した。講演会に先立ち、貝輪製作についての理解を深めることを目的とし、講師による貝輪づくり講座「貝輪博士と貝輪をつくろう」をあわせて実施した。
- 三陸地域で出土する縄文人の貝製装身具の一部に、伊豆諸島で採取される希少貝が流通していることから、貝を通した縄文人の交流について学んだ。

講師は、「オオツタノハ」製貝輪について、従来知られていたオオツタノハの生息北限に対し、出土遺物の分布から推定される採集を伊豆諸島と推定し、現地調査によって「オオツタノハ」生息北限の拡大を明らかにした、貝輪研究の第一人者である。さらに、北限である伊豆諸島から房総半島への流通、房総半島から遠方への拡散ルート推定し、縄文人にとっての「オオツタノハ」製貝輪の意義や、弥生時代の貝輪交易、古墳時代に至る「オオツタノハ」製貝輪の終焉まで盛りだくさんの講演となった。

講演前には、実際の貝輪づくり体験を実施し、講演会と合わせた遠方からの参加者もみられた。随所に盛り込まれた講師による実践研究と現地調査の成果や、広域な分布からみえてくる価値観の共有と交流の在り方に、参加者から熱い感想が寄せられた。



講師



講演会場の様子



貝輪づくりの様子



講師による復元製作品

【来館者の声】

- 資源による生産体制や雇用の促進、縄文→弥生による共有社会から専有社会へ。現代人として非常に参考となる。
人口減少の日本、青森、昔を通して今を考えさせられた。かつての専有社会→縄文のような共有社会への移行、転換など、社会システムの転換期なのでは、参考になるのではないかと、とても知的好奇心をかきたてられました。
- 縄文～弥生の人々の文化的交流、社会的交流がよく見えてきました。出土品のなぞ（砥石）が子どもたちの実習から判明した、というお話、これぞ実践考古学ですね。忍澤先生のお話また伺いたいです。ありがとうございました。

■ 関連事業②特別展プレ企画・考古学講座「東日本の貝塚と貝の利用」

【開催日時】2025年5月10日（土）、6月14日（土）、7月5日（土）
各日14:00～16:00

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 体験交流室

【参加者数】133名（47名、41名、45名）

【実施内容・目的】

- 特別展プレ企画として東日本各地の著名な貝塚を紹介する講演会を開催した。
- 縄文時代の貝塚と集落のあり方や貝塚からうかがえる、当時の海的环境や交流について最新の研究成果を学び、各地の海の様相と縄文人と海のかかわりについて学ぶことを目標とした。



第1回「青森県の貝塚と貝製品」（1-①）



第2回「貝塚からわかる縄文人の暮らし
—松島湾里浜貝塚を中心として—」（2-②）



第3回「東海地域の貝塚の貝輪生産
—渥美半島貝塚群での新知見—」（2-①）



会場の様子（2-②）

特別展プレ企画として東日本各地の著名な貝塚を紹介する講演会を開催した。縄文時代の

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

貝塚と集落のあり方や貝塚からうかがえる当時の海の環境、海でつながる交流について最新の研究成果を学び、特別展で同時期の八戸地域との比較により、展示についての理解を深めることを目的とした。

3回の講座では、縄文時代の貝塚が多数みついている、青森県内、松島湾、渥美半島の3つの地域を取り上げ、それぞれの地域の貝塚の様相からみえる、縄文人と海との関わりについて学んだ。

【来館者の声】

○人にとって、食を供給してくれる場であり、生活を豊かにしてくれる場であることを知れた。

○15年前は海岸（渥美半島）にたくさんの貝塚が落ちていて貝拾い、貝遊びができたが、今はほとんど貝殻がうち上がらないとの事。この自然の変化がとても悲しい。海は大切だと思う。

■ 関連事業③特別展ギャラリートーク

【開催日時】2025年7月12日（土）、7月19日（土）、7月26日（土）
8月2日（土）、8月9日（土）、8月16日（土）、
8月23日（土）、8月30日（土）、9月6日（土）
各日14:00～15:00

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 企画展示室

【参加者数】計47名

【実施内容・目的】

- 展示を担当する学芸員が、直接観覧者に展示のみどころを解説する。毎週土曜日に開催し、当日の観覧者属性（年齢・居住地など）に対応した解説を行った。
- 展示の着眼点や展示品の見方を解説しながら見学することで、展示への理解を深めることを目的とした。



ギャラリートークの様子



ギャラリートークの様子

毎週土曜日の午後2時から、学芸員による1時間程度のギャラリートークを定期開催した。参加者の年齢層は小学生から高齢者までさまざま、夏休みに合わせた県外からの観光客や考古学を学んでいる学生などの参加もみられた。解説を聞きながら見学することでより学びが深まったとの好評の声が多く、ギャラリートーク後も改めてじっくり見学する参加者が多かった。

【来館者の声】

○ギャラリートークを聴き、説明を受けた上で、ビデオで貝輪を作る作業を見て知識が深まりました。

○近くの家（砂浜）も、いろいろなものが流れ着き、汚れていました。昔はより美しくきれいな海で貝や海の生き物がたくさんいたんだろうと思うと、むやみにごみは捨てられないですね。

■関連事業④体験講座「拾ってつくる 貝からアクセサリー」

【開催日時】2025年7月21日（月・祝） 9:00～15:00

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

【参加者数】16名

【実施内容・目的】

- 海岸で縄文時代の貝製装身具（貝輪）に使われた貝を採集し、拾った貝で貝輪をつくってみる体験講座。海岸で漂着した貝殻を採取し、貝輪に適した素材を選んで製作した。
- 実際の海辺での打ち上げ貝の採集活動により、海との結びつきを体感し、海のめぐみへの興味関心を高めるとともに、縄文人の素材採取・選定・製作の工程を追体験し、縄文人の知恵と美意識を学ぶことを目的とした。



浜辺での貝拾い（1-①）



拾った貝の種類を解説（1-②）

縄文時代の装身具である貝輪貝輪に適した素材や、八戸市近郊の海岸で採取できる貝殻についてのレクチャーの後、バスで海岸へ移動し、貝殻拾いを行った。同じ海岸でも素材として適した貝殻が多く打ちあがる地点と少ない地点があること、素材を取りつくさないよう、必要以上の採取は避けることもレクチャーした。

拾った貝殻から素材を選び、石器を使って貝輪を製作した。貝輪に適したベンケイガイ以外にも、ウバガイ（ホッキガイ）などの大型の貝殻を採集した参加者も多く、ベンケイガイで貝輪を作る行程を学んだあと、別の貝種で製作を試みる参加者もいた。

素材となる貝殻以外の貝種も採集した参加者には、それぞれの貝種の同定・解説を行ったことで、海の環境と貝に興味を抱いた参加者も多かった。採集から製作までの体験の中で、素材が打ちあがる場所や素材選びなど、海を熟知していた縄文人の知恵と技術を学ぶ機会となった。



貝輪製作中のようす（2-①）



完成した貝輪（2-②）

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

【来館者の声】

- かいがらをひろうのがたのしかった
- 浜辺にゴミがたくさんおちていて、ゴミをすてないよう気を付けようと思いました。
- 海辺の体験を通して環境について問題意識を持てたこと。創作中縄文の人々の気持ちに思いを果せることができました。スタッフの皆様ありがとうございました。

■関連事業⑤体験講座「種差海岸で貝標本をつくろう！」

【開催日時】2025年8月30日（土） 9：30 ～ 12：00

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

【参加者数】16名

【実施内容・目的】

- 岩礁・砂浜・天然芝生地が混在する名勝種差海岸のうち、砂浜でビーチコーミング活動を行い、現生貝類などの漂着物を採集し、標本づくりを行った。
- 現生貝類の採集や標本の作成を通じて、貝の生態や八戸の貝食文化、海とのつながりを考える機会とする。
- NPO 法人 ACTY（種差海岸インフォメーションセンター指定管理者）と協力し、名勝・日本ジオパークにも登録されている種差海岸の魅力を伝えるとともに、漂着物（海ゴミ）から海の現状への興味関心を高める。



種差海岸芝生地の移動



岩場での貝殻拾い



3

【来館者の声】

- うみは、いろいろな生き物がいて大切なところだと思いました。
- 標本づくり、化石をさわる。資料の本もあってよいですね。

■関連事業⑥これかわ縄文まつり

【開催日時】2025年8月24日（日） 9:30～15:00

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

【参加者数】1,165名

【実施内容・目的】

- 是川遺跡と縄文文化の魅力を広く伝えるために、関連団体の主催で毎年開催している「これかわ縄文まつり」に協力し、当日は観覧料を無料とするほか、縄文体験ワークショップやステージイベントを行った。
- 当日の観覧料を無料とすることで、夏休みの親子連れや地域の方々に幅広く来館してもらう契機となることを目的とした。

■関連事業⑦ミュージアムショップ「これカフェ」での関連メニューの提供

【開催日時】2025年7月12日（土）～2025年9月7日（日）

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 ミュージアムショップ

【参加者数】200名（期間中200食提供）

【実施内容・目的】

- 展覧会に親しみをもってもらうことを目的とし、館内のミュージアムショップ「これカフェ」で展覧会関連メニューとして「貝の形のマドレーヌを提供した。
- 展覧会見学前後に関連メニューを食べてもらうことで、展覧会をより深く印象づけ、八戸と海とのかかわりを想起させることを目的とした。

■関連事業⑧是川小学校縄文学習「縄文の衣・食・住」との連携

【開催日時】2025年9月4日（木）9：30～14：30

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 企画展示室

【参加者数】21名

【実施内容・目的】

- 地元小学校と連携している「縄文の衣・食・住」をテーマとする縄文学習の中で、貝を切り口にした衣（アクセサリー）として、学芸員の解説による特別展の見学、貝輪づくり体験を行った。
- 海から約7km離れたやや内陸に住む小学生に、縄文文化を通じた海と人のかかわりについて伝える契機とするとともに、縄文人の暮らし・装いの中には、山のめぐみと海のめぐみが入り入れられていることを学ぶことを目的とした。

【来館者の声】

○。
○。

■関連事業⑨「八戸の漁業の今を知ろう！おさかな学習会」

【開催日時】2025年8月5日（火）10：00～11：30

【開催場所】八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 体験交流室

【参加者数】22名

【実施内容・目的】

- 日本有数の水揚げ高を誇る八戸市の漁業の今を知ることが目的とし、八戸市水産事務所から講師を招聘し、小学生親子対象のおさかな学習会を開催した。
- 現在の八戸の漁業の概要や水揚げされる魚や流通について学習するとともに、魚食についても学ぶことを目的とした。夏休みの親子対象で開催することにより、夏休みの自由研究としての取り組み拡充や魚食についての食育効果拡大を図った。

【来館者の声】 ※アンケート回答結果をもとに、簡潔に記入。

○魚をたべられるまで、こんなにたくさんみちのりがあったと思わなかった。

○安定してお魚が食べられる仕組みを教えていただき、視野が広がりました。今日の学習を、ぜひ小学校などでも出前出張していただきたいです。

○今まで、縄文の展示を見ても、ふーんとあまり興味を持たずにみていた。貝や魚、食について、今後はすごく見ると思います。無人島のテレビ番組でも、魚はとりやすく食べやすいんだな—と思っていたので、縄文人もきっとおいしく食べていたことでしょう。展示行ってきます。

【事業全体のまとめ】 ※簡潔に記入。

※本サポート事業を活用したことによって、新たに実施できた成果（連携体制、ボリューム、クオリティ）や手法等の工夫を交えて、いかに効果的な「海の学び」を実施できたのか、参加者の感想などをもとに総括を記入。

3. 主な連携・協力先について

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1.	
2.	
3.	
4.	
5.	

※主に教育機関や地域団体、他館などを中心に記載。表が不足する場合等は適宜増減すること

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1.	
2.	
3.	
4.	
5.	

※TV・新聞・雑誌等、主なものを中心に記載。表が不足する場合等は適宜増減すること

以上